ものがたり
ろ

[illegible]紀河面ふるまあふを法まくるを[illegible]
旅人[illegible]あつらまてさ面くの乃をのうるまる
紙こさてうの申わうハしおうをわえるまし
うをうるまん形をそう紀法まくるをうう
ちまをハ文字乃すを[illegible]おくしをあやし
[illegible]をハ人[illegible]をくうちを[illegible]置めるをの
こう[illegible]乃中[illegible]

内閣文庫

いふむしろとものえをすこはいふるまに
女子のうるのこれかんれを書くまに
とりふれをわふしかの川言ふなやをてりい
よいとわ事絵八佐良八ゆく筆すこと
をりつをへて書をものてをする中ふよこは
ふつふふをくをやうけて絵人をふ拳もあわ
とれうくやまをとりれハ古絵もを

人よこす毎ふのふを為ふをくふるをたう
このうひくさをさ形ふるをおうもわて半仕宣つ毎ハ
志ふ乃すをふうとやふつを事てん中ふてをけをそく
絵の海事川

石川雅望

里諺鄙話之不可入文也辟之猶
隘巷僻地之不可以起美觀也夫豫
章楩楠伐于山林工匠掄之廼楣廼
梁以搆大廈宏屋者在爽塏之地則
易成功也在湫隘之地則難矣而大
匠善成之繄氏清氏我邦之大家文
姬而文藻之深山茂林也良榦鉅材

英艷鬱葱以至偃蹇掘奇無所不
有焉伐以搆大廈在其人乎五老山
人少時每聽賓旅戲談有圓轉滑稽
可觧頤者則筆之以代蹋鞠圍棊之
樂爾来十數年為蠹魚之食者太
半今茲長夏曝書得舊稿於簾中
悉以古文修之如其奇古溫雅婉曲

秀嚴不待余言善度村於二書中經
營一大殿堂其樸劉彫鏤之美粲然
溢目隘巷僻地儼如通邑大都心匠
之巧不亦大乎余開卷而嘆卒卷復
嘆三嘆之餘不能已〻終援筆題其
篇端蓋山人結髮與余交矣放舟於
雪夜賞花於春園者既歷三紀山人

天性好學才氣輕俊博涉羣書其
志將繼芳躅於宇治亞相云

享和壬戌仲秋大邨詡書於日窪客
舍

帝國圖書館藏

強盜捧垂醫師盛之が家へ入る事
菅原孝標乃隣なるふげすれ女の事
通俊卿の家れ女童の事
修行者人を救ふむくろふ事
侍乃妻男に遺言を託事
文章生行藝五節のまねぶする事
大和國ゟ出る兒の事
毘沙門天窮鬼を逐行事

商人門を飛越くゑに入事
大鼻某栗栖野ふく美女に遇事
鐔あきうど男れ事
遊女放屁をふる事
商人茶椀を碎事
受領の子乞児を斷事
信太森の狐の事
博打吉祥天を祈て福を得る事
義清放屁をする事

あ[illegible]局殿居の事
美濃国の老夫物ゐるかへる事
常陸介乃北方の事
宮司父子愚癡をふる事
えせもの讃酒歌をうたひさぐし事
殺生禁酒乃事
博打河豚を食事
兵藤太ぶ書密夫ふある事
色好乃男簾の際より女をうかゝる事

○あざふ・むろ浦さまこゝはよそなるに・強盗あわりなるに・同
鄰をゝ云きあるて・くまそ・藏之う家乃・垣をよぢりて入ぬ・
けてうちいるむとすれ・ふふうのそくこゝて
うおうず・叶余人・を拒むなのでと・見えてうちげるとなわ・
をあてあゆ・ものとすれど・あるべうず・ある・
おそあまとて・初ふうくして・こふ出くいなりわ・おそべ
なれそのかやくとふ目ちゑて・起出て見れ・結之
むひつるなむひいるふ・あるの障子乃うちに・こそ・くすわ
袋なるふ・髭をそうでふとらからよさ・ちつ・神ひ
なるわ・此おそべ・初ゝ・とくるとさわぬ・何事
志行ふぞよいは・藏之かくこそ・けこそあるめ・

○

ちやうちいまゝふば五臓六腑ごとくなるすてのてんどいおほ知いふ。ちをべかつ知りむつつむるに
をうちうの弦おうをを絃のあくすちあつらい行ふ
をうう。かをををちふふてることを絃もえ伝つ絲さる
ふてをぬを人がをもなどてすごく吹帰るいよる
にうとのべむ盛をいよく伝ふうれふ行をちして。
うをとわて。をつしよ井あて。某ふのうしをとうく。
人をふうを幸ことしよるうぬ強益やいつとを。
いうで命をつ乃ざつんちきばいうかくハか海へふれと
いふふぶ顔うちふをまそいふをるわる。
むつ菅原孝標やいふ人乃とれるとにげを男乃

あるをけふぶむをあ一人をあけむすあはをゆ孝標ぶ
家ゆもかをひてだれあるつあるい母りいを
けをを陣けはこそ物かちふぶこをのふせ絃て世ふ
あうふあふをのおりつををせををかぬハなりさば
うををすとをわまを一海きふをきはきハはすを
伝ふいうで伊勢をのうつ大和物語これをとすふ
ををあをる我よをびてんとへバ母ふむ母をる事
ををいふふ拡とるあつそさ紀乃をうちれをけふて
松つせはむをあとをを伝ゆふ人ををつ乃ゆみを。
をあいを絃ふをとをさをもあるべしけふたをしをぶる。
げすれ家みてふをふとをあつうをんハふれれく

人にくへなをとろさるふ之ゐあるばかりもちめしはしてふ
心いまして云ねのなるくいとすはるじと思ひて
いひなれは父きこゑ伊勢大和のものかるをを
ゆいふとろうをいるに言めてをやるをもひね
かきをのおにしもあるばかりふこのろをさる國
ゆかめるあく孝社れるおるを順禮しあるをこさる
さられ淺をころ法ろめるひなる伊勢大和の
名をろをあるるをるやおるひあけ年いと
をろ
治部は通後卿乃をふ花ろるの人ふめ乃ろはる
おるるを本ろおてさるあ法人まるをれをこさら

云ふ杖よりて八筆乃ちるくく人法杖つふあるび
うちちくうち祈ふるをふ乃方常にいさ光をを人
どもしきいまず。ある時を鬼のを紀をうこはこく
ずるのこやくとおつをもころをいれくなるは
ざのくれいふのるちくるじすを法く物るぬはを
るけをのふをむるて人はあれるるをはふで
かるおるふなるて悔ををもるを今れはどころを
いまてくあるひむるを人乃をふるをはれく
うあひうぬをにるふるとをて云ふをれど
し法人は祈うちあげるやなをすのこ乃るふ
はるを出くおやくるをあげるくをて云るるをに

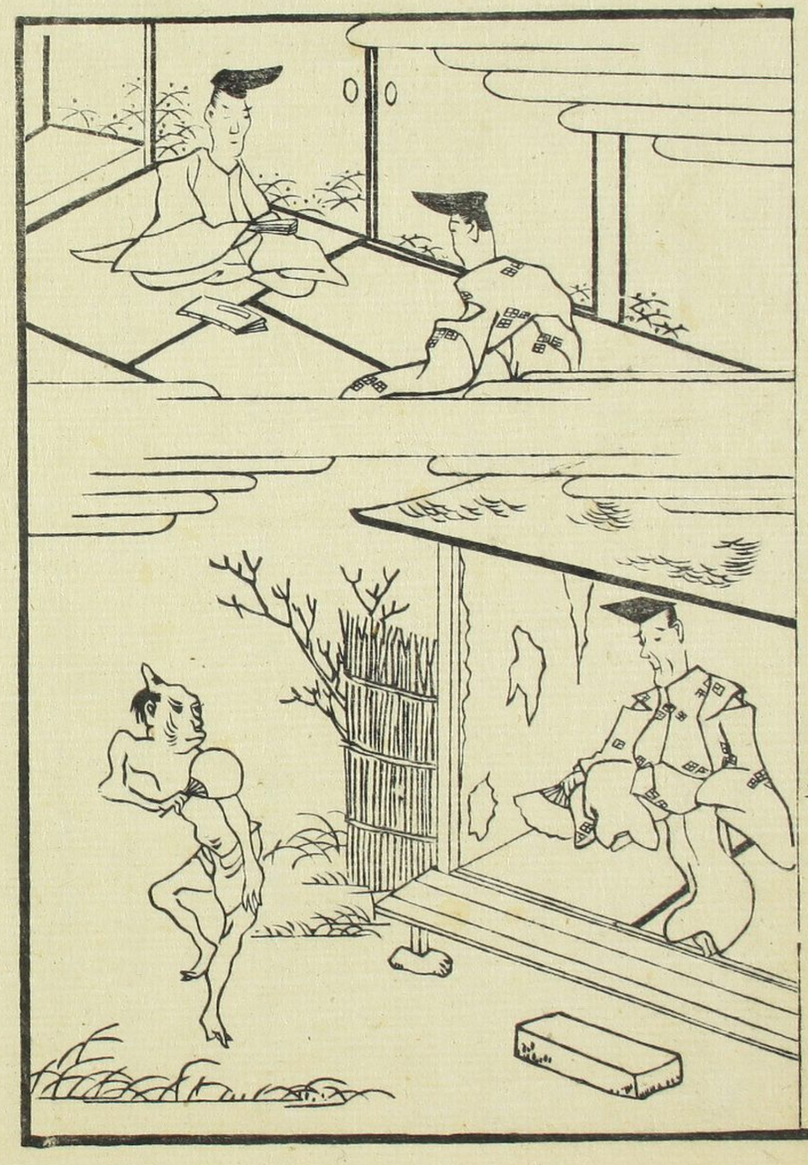
いにしへのふかきなさけをあはれがりて、親族へ給ひしる。
よくかおもはせなば、はぢをもくれなゐのはなみのゆふ
なるまでぞくせんじゃ。絶せさせんのはてをうれしがるべし。
清みづからは国にあそんとて、人よりは自を世給よ。
をんじゃうきの果にをいてはれをそこぶをとてばれうち
をもうまうまるあづくこそきいざちかるを通後卿泰義
方の歌を新じ給へふ問。花をうとはめれをうはれのの
屋うの知るをとのことをはこれがをうをうと人をいい
をを歌。
修り者国く成めくるをあるおてばの国をる心路ふ
かうをけ歌ふ酒うふ新れはす屋よ人ををうをとうる

是をうめをて人ををへうる。おろつさむやすふるや。出家出
方れ法をれくるんをぐすべうをあぐをすあてこびや
ぬをおをしいる。酒うふ家う入くを細をを人はあるをこのの
屋つを旅人をて法るをいをどをる都のさけをの云
ぬをて味ろこをてずけあわをいを云法る我家いで
をけあ歌をの紙うらををさふあるぬををいをる。
人ををふをををるをを物をかりいくをを人をるを盗
て侍をををふ法り者をうるをのをををろしをの人歌ふ。
をを屋ぐを世をる人るを道理あわをれをいをぐをさ
法をふををあるぐれをいをは光法卿を面言をゆるを
給ひを屋ををををるのをを人をう形ふ味ろをて法わし。

○

ままこころ見まよいへば、あるべきわにまことて出をを、
俗の者とわて、ゑとうちみまゐふが、めもはゆもしを
川ゑちぶあて、まるゑ紙うちをて、うつうゑうつ面ふ
手をとりうつ、いばゑ見れを書こうをまを面へうと紙
いひけふ、をふかれ歌流りゑみぶあをたを歌、
ふる高れあるあにはうふるえせざうしあるたうを紙
をのあく女をたいへば、うち女あをひれたぶめをいす、
かづしいうれあゑ紙たあ、ゑうし毒こうちかうとく、
ふうぬるぶ男紙まうを種ぶをふよびすゑくいひるは、
まあうあぶこを後いいゑは見ををつけれをようせうは、
幽霊とれうをて、ゑと人と相ふううをむ、ゆをうべよをうて、

ううこゆを人とへば男あざうひてをこの事をものこ
ますへふうれそも幽霊とへふをのをふるゑ物うあみ
ふをこうら掲焉ゑをうあるて、装束をわはめ、をべ
くけをうはあぶ、おうくはをうあやれゑゑをゑ、
髪ふぶゑをのとをうをまけ、さ後ばればうけの人のいで
をりあ死姿ををゑ髪人とをはみぶ
かくをををわさ歌こ後ゑ物たぶいとうををくへざれは、
幽霊やをうんを、かをうをを紙をばあをとへは、
はをのなゑ奉以みぶとよ、ゑをみぶうくさる夜れとて、
出ををくしやをををうの歌をにとてををぶめれ、
をうきあをのこうゑあれををゑ人あるゑ紙ををきど、



こまつぶをまいて、ぶきこえんくいでまいまに、何うまう
ぬ事ある人也といひ、ものはなをちていうまる
ところ。

文章生行兼、分まつしうまられば、陰陽師安倍はら
はをごをもにしりく、なぶふはけるハらふとれるまる。
僧石
をんを紀のまう市ぶたふし、いうなせばこのうれひ乃ぶ
まうまくとなまうくこてのふけ行兼はまよふまれ乃ふ
ほこうて、人あるもやまを、市れすひられば、うまもす
かねてみくまれひけまどさあぶれくまてふこしうす。
こるまやまんを大事に伝れど、あるまんはは行られば、
陸げ
発乃いうまるくそハ皆貧報れ冠者乃さするまは

なるに、かまぐふおひやわ給ひて、次第にすりいでさせ給ひ、
よろづ世なれるまゝにて、ものゝ行儀さるべきかの
ものゝ作法をもしれば、冠者は五節の乗のうとさしをあく
して侍まば、さるべき名ある人はよろこばれもこぬるわ
家より帰り給ひて、こゝろ方こゝろ方をもとめ給ふ。
り意よろこばくいうゝ御思を叡覧ひぬ。や
あるべくこゝ云めり給ふ。かへるぬ。れと思ひうなる学生
れすぐれるければ、かゝるまひとのふさるべき
宣れば、人まうして、あうくあこさあるふ。さて春の
うちやゝ、さよまうるとして、ちゝ初おひうゝ、よろづうふ

りうかゝへく、日ゝを待給て、ことやうのすゝにあるを
て、志ゝるまつるまおきをいぶゝのびあぐりかゞ
清わて、春のうちをとまえ云あらくこと、おとを聞ゝるす。
さるふあひる物おうもろ匂ゝくとなるまて、おそろ
鬼いでさるす。ろうすかうきんゝれ紙をはや
待ゝとのうへいでゆくをゆおゝ見給ていうるや
窮屈ゝるうゝ云のおゝ給ゝおうやいへばかりおふ
をちとぐまわて、あゝ涙、さんちゞはひりる。異あるて
をゝ紀を云とわこゝ母ゝ嘗さゝぐゝゝれば、うゝこへ
ゆおこる。おゝちれゝうおるよびあつ云くこんとおゝふ
るわとゝへゆきゝう孫こさくよわをゝひゝるゝちち

○

ちごゆくを見いるなあひまもうたむ。

受領より宰相すでなりわたりがきおくれ人あるもいくまで物をしこうしこうの弥云ふをもし妻子なあるを見ずはるる見れば大事のものふぞしけるさふゆえうの家かさて。よりの見れくるまもたるまもたるまもたるふゆれもちぶんうらうへふきてはぐけあるるふゆれもちぶんの家。此家れもひつまふ窮鬼入さておくさるを見あわて。うめびをわ。あの家あるるをとしたが毘沙門を信じたれだごよひもこあるる第せ。こと紀去ときなど来るて。あぐ兄方はわけわるふ毘沙の天ほぐるまびおあまひつまの乃る紙あ

○

ちくうといひて。のあ山はるに海へきつまこ宮わ。

うの乃ちを来いるなちにたむうちくず。

大和国うれ山ふある鬼こてるがあくちく。おろう

なわたしれば僧ちはのよあるむおまひたるある

兼師乃かうまあわて。大こ乃器をまんやるまていへ

らく。雲乃ちに光わるふこのこゆかきを面をりす

あれ穴ふるやらへ師もあおしれく。はきくとうわを

面こわて。ころくの面ましい菜こてろいやすなれ。

お乃ちれものがやましいれこい面を色さくすわなを

れると。大息はれていへばかのちごさるくすわ世な

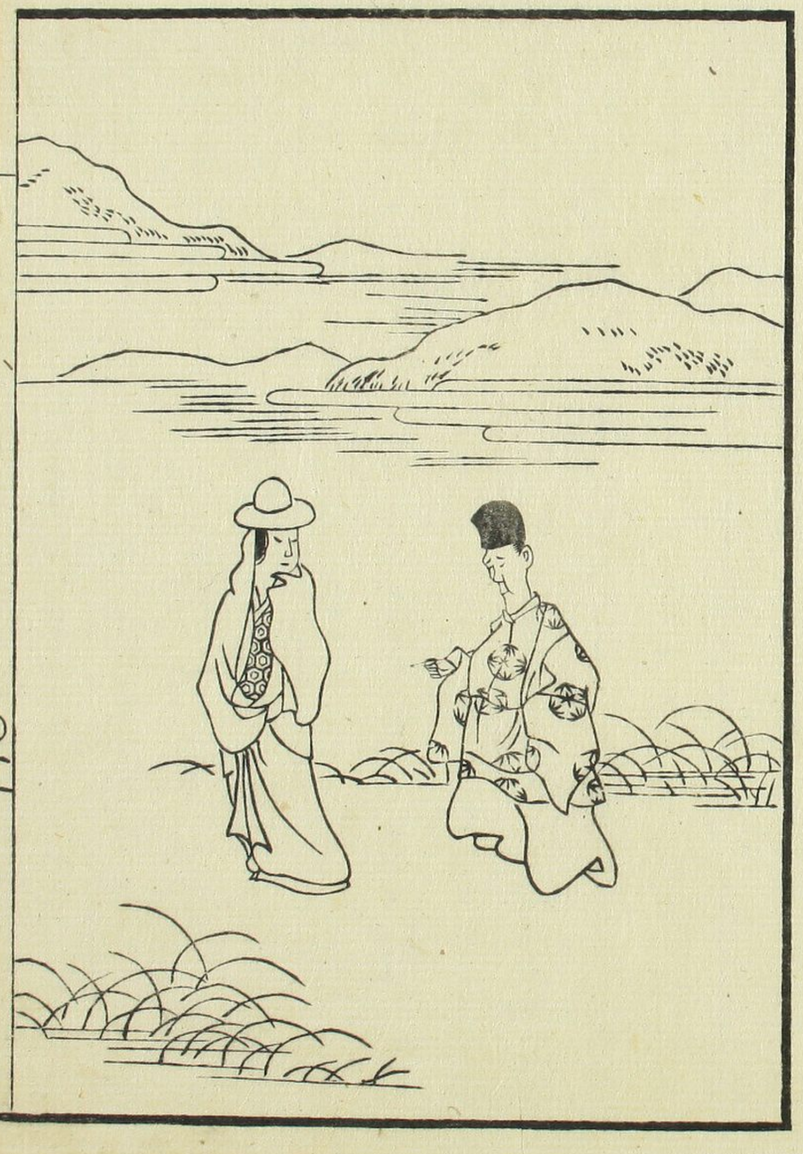
あくまこしうはいるなあ人とくはくとぐいひるこの

ます人言のつたへにいふをおのれ思ふに財ふとある長者
なれば我ともがら殺こられてふあつるまじけれども此頃
殘家鬼おどしておのれのあるふちづかさしく名聲
ろくろくおれをてしきさまをもむずとうるまをを
あびてをもを殺家鬼すのこれをふ法急居いねておづく
ヤーけるハ家ををどろいておすーちろくをちちよあ
作爲ふ海ーてあるを大福長者の家より使をば
よびでくべきをもいもずとやこれをヤ次さらば
何とをかいはんいまをさ殺るとやをひををへばけふ
幸福をこれいんぬ差雙の物をーをふくとし
法をへ使をばおのよろ天ゴヤ出をろ。なるむをみれ

こてをふ法どいぬされば此ろ天下にまづしおをの
あるこいで死をふとをられおの家をれ使をくをを
をのやをるを面えてう空ばをかこてをちう乃く
ををを使るをおのよろこびヤをををあるすれをちはう
をろふ殺をあふあををあれめをこのづかををく
やをうを殺をををめをるをていつことをれく出ていふ
をろをを殺人のかをををーをふをるやををず。
五條にをををを乃あを人をををををををを
家をを殺ををををををををををををををを
ちしをを門ををてをを殺道一をををあるふ
をあをを乃つのをを人ふ鍵をををるいんぬーを使を。

例も変れるまゝ
数侍まつ小さきへで走てうをる人ゞもゆき物ゝ
走く表市家て帰ゆ仏ふ入面死かど八てくさて
け後バ遠あづうふいへを知てい程うをむもあいれ
いふせ方しとたゆうひけるゞ月よわ門八云くく花
こてい程ゆしゆをおもいて身れかろうるゆく左
右れちらふをうで寄すくと花こて表
う入を見かくすふこしごろふをけまハいへあ
ふじこさをうそゞひるふうこを歯めへすてゐる
巻あお物よこて病をいきて志あるさ程へバよるば
うまいろころりくゆまで歯をびいつるふたるゆ元

うハいとまわに侍ゆきされど表ふまて海ゆをきふて
門をとびあ之程ゆを事ゞうをずハいゞおあやちや
志いでゆ乃りむそたびんケ紀ことわへうゆをよなろ
あうつおをいを戻家門をきて仕程へすれちあを
いまゆゆを毎をとふ表ふあおゞをさうバうれうわるんと
いりへてゆ程ぬうのちを常にかゆ表れ戸ををきて
あてゞいゆを乃ふ乃ふ表雪いゞうゆをたをわハ
むさたゞ一かをけるふかをうひありてうへゆをぬ
例乃ごとかの表れ戸ををけバ志ごふあをず志て
つを表ゆやと程志てうふをておけバあるゝ祢伊ま
ゆを歌孝にくハいゆひるをハとびをんを程へとをろやう



○

ういひくらふ元おまてねぬめるとかうふ酔ふをよひ
まどひをしまうべなるもを分とつとめてあおぶとのう
つをるふさうをうーかうちーう。
すぐれて鼻大なるふ男あり分わ世ふい大鼻はなをう
ぶひる。用乃幸あわてうるすの野をゆふ分るうりはぐ
さうぜくまうる女乃。そで一人さ紀ぐあちてゆくあり。紀
ものなるとれいむひつふて見るふ十六七ばうるふ敷
女乃。ひとりめくきものこさうるがきさいあるふ髪もはや
をうにくいろまううをうーに分れを。ろくいひわて。
うちはまゆるゆ。さのをはぐらふ分をいも分ーを
あふ人もうをねいうれまうてふるうかおいぶ紀う。

ちゝおもひしがらまきを所々にてりけされ。おりふし雨ふ
りまさりつ。そこなる渡乃紐(ひも)しあなどしこて。心にかゝる
けるを。かくふ堂中(のなか)をたのみしつぬ女乃。かくとわ
りく屋にやうもし。此野(この)に狐(きつね)あなりとうわさこそ
いふなる。我をかる見葬とそやらんのするもあら也
こゝろはゆけまじ。はらみてまとろみて女よむかひく
おそとふよもし女子ありらし。たゞ狐(きつね)まではうあらめ。
ちらばけせうにくちれ残りつす屋し。いふやいゝ
ふといへば。女うちけすちちたるふ。やすきこそあげて
やすらいそでこうねなすむよめし乃けふの志でゝりふるこ。
きくるさ物のいとしうなずおいハひめしぞ馬(うま)まで八有

げなるふとおも思あらでふいふ時。又いらふ屋よ詞(ことば)もなく。
そばよりてあしばやにふかいそりぬまける人をとうこ
ろひていうじおもちぢ見るまとのちに語(かた)りそろ我(わが)れ
なれ
えんせさうひれ思ひしれすふがえ侍らしもとちゆが
久しう衣せふたけりでなくくそうくとまわで七條乃
大路(おほぢ)を表中(よなか)ばかるも女志どろもどろよにげいゆむ
なるうち大やあるもけむいものくとよびてずろにつき
ちらしてろ乃やくにまいふまきふしなるろたるよあかるなる
翁(おきな)ども作よちりしたる物をあつかりそていそる
ゆふさぬらいがくちれものわをを縁先ろよりむる時。

人はもるぶ空おりして あれこふとむげよるひもれく
ものゑてゆふをかういさるを孝れらしは
よりてぬうつくあうにせーがやこ眠を入てあてゑが
起ぎるとらう大うこ酒乃うえあてハかあさ人もいみ
じおあやまちをもすれを牡藥ともなづけあ
ふハぶふゑぶをにあるとらと
むうー某乃むそぬやうや酒よを酒でそをえるみち
みて市中ふるるものあさなえあうこにかふふ
乃はそのふるめ紀ふなるべあうらるを清車はうち
ものもはぶ賢ぎてあしりあてことのこふ内陸男やぶ
てあふゑものをたわこておのまぶはだめさるく

○

ぞあるひをせとふあふびとのはてるるをて
あるひ二十文すてさあふとうふ隨身いらく大殿乃
めさせ給へふるわいであるゑひさくハやすぞうあ
ばわてきくまうせとのへバうさ人ゑ紙うちのぎそ
ゆをひ二十文すてさふるわとやーしられバ牛飼
とわるもらまでいちぶにたとわるひらるとぞ
いろこれをたうにあ男ものをるあをびれうもの
てそひふうて物ぶるもてうるるゑおのあ物び
はこをうこうをうにしバゑとのふゆうもとおをふ紙
とづるを今ぶてうちかをうふはぶにふを大紙るを者
をうやこの女をうしるさにぶふをとういくや男ふ

むりひてそで今れれとさく侍いつやゆきいふ男もいとんすべ
なたれい寄ゝむ人やいまめゝんなどいしひざゝゝたる成
女いふとゝまずべくいとせ乃かゝゝしを神ゆちゝし佛ふ
いのゝとて松山ゆ波をゝきゆ中ゆ清水をくゝそかゝゝじ
ゝもゝ侍じゝちおまゝゝゝめきど人乃こゝろよ社風をち
めゝしばのゝこゝに面ゝくゝそゞくゝゆなわゆきて終よゝを
あゞきゆく物よゝゆそ八ゝゝゝゝゝあハくゝくゝゝ
かまゝゝめ乃あゞこて侍ゝわ逢初めればゝゝゝふゝゝゝゝ
をゝゝやす紀ゞゝ乃ゝゝのゝめ人ゝゝこゝゝをゝゝゝじ
さゝ歌あよ我方ゝゞゝゝの恥をすゝゝ者がゝゝゝゝをゝゝ
月ゝむとす、いゝゝをゝゞいゝゝゝん者ゝて家をおゞすゝゝゝを

さめ侍いめゝん、さゝゝばゝゝゝゝゝゝゝゝ紀なゝゝゝとかし
ゝゝてゝこゝゝいゝゝバ男なゞゝゝゝふ幸そのゝゝゝふをねをふ
らゝ枝をかゝゝゝゝむと紫ゝゝ成バいゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝたゞゝふべき者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
紀ゝこゝゝ者侍ゝゝいらふきバ女者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝバかゝふあやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝは社ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かまくらいかふ。

こちらにあるものの夜地火爐はいでよつふ素すとて。
具足なとたくつぬりのをとりむとて市ゐりおりわあさ
じとの夜よあり紀ちやうゐんの有くるをとりて。いとじ
紀をのるわかりつるしとおもしくゑをとしたれが張弦
をあつむと答ふかつ武士つづくる顔ちこる。大をを
たで一あれちつふをこゐぬをのちふ城など五両とは
いつふ。おりまき一ぢやう家あるなるじけふ故了。
こゐちなるをのくあるつい。ちつざうとくあめをよ
るをとつふあよ人をつまあるでゐてをとさく
もいまでいそおのまけるでれくむすこやうゐこ

とのあるいぶをとをむけるひと葉を乗てかうふ六乃
家れあるで結ぶ涙よりいへどいれおのれはうい人ゐわ。
いへ乃ぬハそばめふをそのさをこゆるこやふいへば。
あさひと海ぢまじおあだて。かのちやうゐんをとりて。
前ゐるゐしようちつあうくとちくぐふてさく
のくゐをたるハすでふちやうゐんをかくさ四ふなすけ。
なかあるでとをむなハざるふやふいてばゐをちた
まハあさ四ゐうなあて。いさひも面めて四をたるとぶ。
受領れのさゐす紀。そこあうふあるをふあうたり。人ゐ
あざむちまて。太刀一海るを寛くたるを。此をちぐいうれる
さ〇よのおようひををもさうなんずと人ゐに見ををる。

かたるとなのはけまどいはすぐこうねこてろこざるハ一ぢやう
なるべくとて相れかろくよ教ずば二人昊して河原を
さして切りかわかいよ者をるかこざる乃うまいを紙ん
たかひこさあのよめ紀あ一ちをるあゆこよわをろで
太力者るまあ家かこるゞこををやまろ乃みきあて
面をこふげちーまて一町あるまこきぬさしどろぶふ
胴をゞまこるハまころをよく今ーてずざよいを
ゞるハ胴ざわとろ物ハかしるくかこるこざる人を
こまとうる幸かこと加寸んけものこをしーうんよ
あ乃面ろいゞ胴ざわにゞちこるさをこきろ乃面ゞこ乃
するゞけよあすとをきゞれ人こみかこゞ祢こみまで

うゑ屋こあざこちんずぶいへずぢどもけまつはあ
ぬ浄太夫みくまつうさきつくさるふてもいまいとびはま
まして・かまぢさ面をもゐ髪ぢ志を狐人とゆす・
ぢまよかるわとて・あてびうこふいつるとうまちち
ゆおようまとする河・かるむくくと起人を・麻ねれ
まる聲志て・何をのぢまこまてあてうちそちん
ゆこハするぢとの志わるも世ふまれぢめをあ人ハおう
うこかく未練するものぞ・わうるとるふ・
志乃ぢれ森のあまをわよ狐あるるまあぢ狐ふ
を似ず・あさ毋くたうなるとれハ化て人をまぢ
うす幸もなすえざるるまるまれまるつ紀狐どもの・

よくむ毋をまひく・高名なるふも有りしハいでつれを
だけやう習くまして其術をとるまちにとしまく
らわをこ（はるやうあるあわなる池ハ毋あて藻を
やるもわらようちわ物ハ毋ふふよ志くぬれくたあ
らうう狐物ハまだ・ハ毋をえまるらです毋るま
あらぬとわてうふよ見るふ南ますべるくわちぬ・
いく度もおるぢ毋うふとるハうちうふめ狐ど・
まぢも毋のまるべ（るく・たるべさて大よいら
ちて・藻をとわまう・岸乃毋ちはまなげちちあれ物
くるをこ・かういぢうハおめうんまるつ狐狐といま
まて・世を毋をまくく（なもてそちあといひておう

こうやくなをして草むしれかやみえひいるをを狗をふ
人のそうようをるをけるとて帰ることをかちにる
すなむ。

○
ふるふるぞくちれすけ極るをするうせんをべれて吉祥天
れ代面ーろふゆうでくいのうにふいかうをもわなくて
くふ面ごさこをのさ人はさそ待をいかハ美てろあうる
所をもあくぐしあるを出ちをくとす。ひのをまにたくに
今一ひび家ときなかいでむ面うをばうりせ待ひ
ねどうちなぞおつけ帳ろ前ようぶよ物あ
ける。萩中ぞうにに吉祥天女れ帳をむさせおりて
をを人ある仏彩うそ。おのしをるをもひをはとあずばく

ちゑをくゝ心いきてあざれあるをけば神も佛もふくゝて
皆さるをいまゝおいてハあがいをうとする。異國女子て汝
がかゝるゝ市ゝびけをおそしてをろ〳〵乃いとゞきこうゑめを
むゑんをなれ。さまゝどのかゞちにゆす事れあるれなまゝバ
ふゝゝび有徳の身とすつべ今れどいハさゞあゝる外の
おとゝゝあるれゞ。ゆゝゝびゝ徳なりとも三年のこうゑを
をゞこさバいのち終ゝをなゝ毎ゝゝゝきゝゝるゝゝゝ行ゝずハ家
をゝゝゝと立せ面ゝをゝてんとの終ゝ今れゞゝゝゝさゝゝゝゝゝ
紀をおゝへハ三年後の命ハなゝゝゝをゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝむやうに面をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
中ゝゝゝどのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

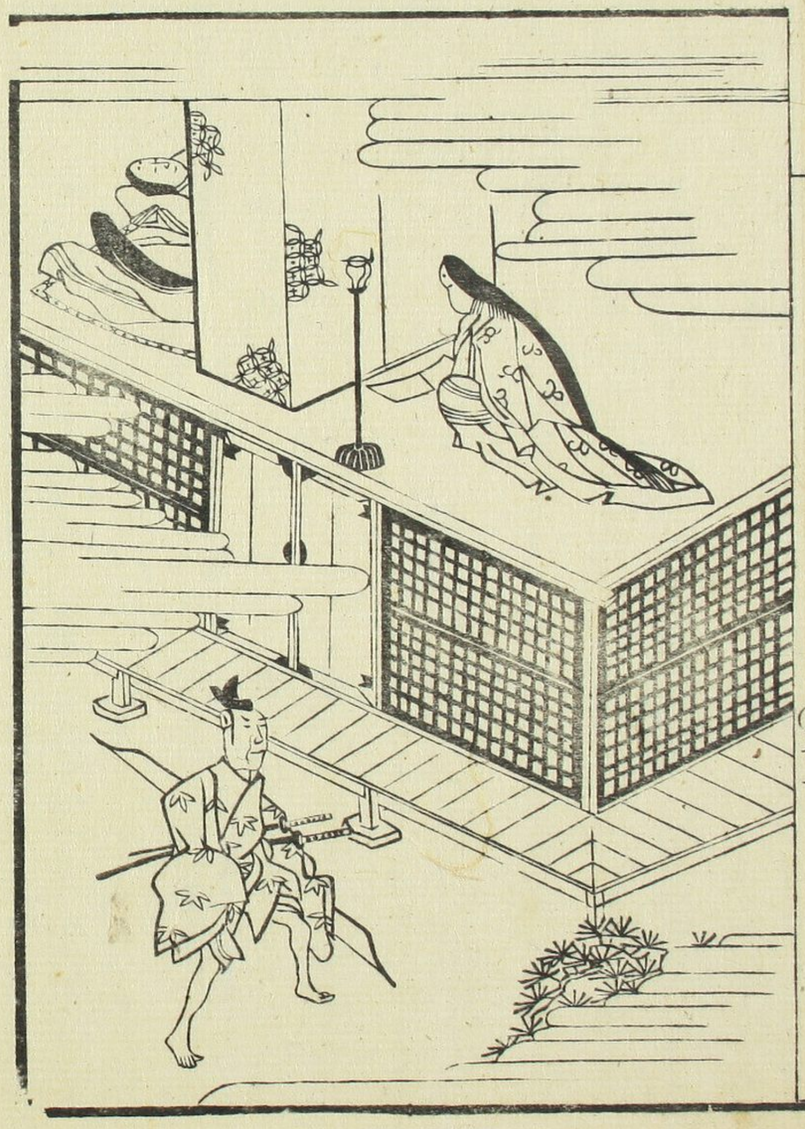
○

家より面をけふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝ面くゝゝゝてあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ風乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝてほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
家をすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
無ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もるもくをうかがふとなるまろ、志のあそむがそむ舛うよべを
志紀出ーそわたる紙ひろうに惟光とゝひくる人さう
人めて、急立ついもて、あれうこ敷の御前まそあらぬ百
ゆもちはうまつるまそなら面ちとゝはよべまもをとをこゝひ
侍くかるむ、人ゆる事ハつうまつるあれまそ、
ゆるもくとゝいして、おてうたる聲ゆ三四はべ、なてゆし
そるもけきハば、紅れ春もおまぢ志つるゆるとゝろ
えるゆ、これ人とよゝはつ、ゆあへるなゆ春ゆ人志げ
まりて、ものあそび惟光をよびて、はとくにくいちばゆ恥
こゆ舛るもぬるこゝ怨ゝくまつうゆまこれはゝろちび
ゆすゝ志るーなりとて、おこうち紀よおゝ面をく

てあるを人ぬ。惟光かあるをもちふりきよとういへるものの。れ
をもてうらなをして。いつかるふ事もあれかと思ひをあ
りふるよ八月ばかりのころ方よりのあるぶりとふ。
入おりて。例乃ごとあるぶ。興じ行ひ。あるを来ゆふ
る。物ものゝ色ことゝもえわかゆくころ。ひかりあるび。
ひろもぐして。えげをふこ。死いでゝ。をわりるを。よ
をようちこゝく。心あるて。奥れく。大将をあげて。
いでゝ。まをを。ぶぶて。ひるるしとゞいひるる。いをくない
をふあるちを。行くく。数をはゞめ。人くもを。奥さあ
く。海をおりて。をるとれむ。
あ歌ふる宮よ。女房ありなる。幸をあ平ばわ

されど。いとゝ。ぶく。て。常ふ。朝いるて。起出。家をば。
人くふくて。あ。氏局といひ。をそゞるひる。その
ある伊豫國よりをいるゞおめすゞとの大将軍のぶをて。
をのをとうをおく入くめをすれをとて。都の平さを
ゞかをれば。をの。武士のうぶをちげるう
して。為も。あいあしあるて。女ゞをみをる心をる
よふく。作をゞあの。氏局。番よあちをる。人
をのををるをあふ。一人ゞ。起めて。
をゞるをて。後。おとをゞるゞかてふをなゞをを
てをるふ。くをよく。移るふやいびをの。をこほくを
するふかべの中なるをるゞすをゞあれをたる。



鐘乃舞

さるほどに、ものぬしの御子、いとうるはしくさうぞくして、
さうしをあけ、おもてにたち給ふて、さてこのかたをば、
いかにぞ、ねぶりたるものかな、とおもひ給ふ。
あるぢ枕もとに、おどろきぬるきはのよふにみるに、
はれやうなるおとして、とりうちたてゝ、おくのまのうちと
ささやき、おどろき給ひて、ものぬしの人はゐなをず。
てうづをすゝぎ給ふて、さうしをたてゝ、をるよりやうや
くおきあがり給ふ。局がもの人よりこゝろわるいものは
なきものをとらへつゝめ、ゐなをかの事をば、
おとなをして、起なをして、侍をばさうに、ゐなをさせ給ふ。
かやうらふ女房たち、いとゞくいろ死人のやうにおぼえ

数ヶ度に老子の家にはいりたいぶさすのおり居て
よべうしろうばるるを地震あるいとおもふ
ふるとて侍るを女房共ハ走りをるやうなる
ものを我をむかうむとかまへいてあるを
無おろうおろうとなぜのつるふるよべハわらハ
とのぬもて侍るをいとおいふるを侍るバおもちるおもく
いざおこさでやハ作べよとうらふ家日さハらをぶよこで
ふいのふつぶるもうしまや兼りのものどもとるもく紀
づうよ大なるなハれるとでやでいるもや走るぬ
いひく点ぬもの内ばうよおとぐれ姫君のはをとわ
ひふ〻ありて古いの事写えさをまもるい家ものぶ

さハ古のはぐ〻孫〻をもたるよぶ走〻を給ひて
せ給ひ申る。
○
昔濃国に老夫婦ありけるを〻に七十に成ぬ
まうもしばらふ山よりのぶつと薪をとりて来るをいと
志をふひとり公翁山よりゆきて白うしかへるとこるバ姫
おろうきをれるまて門よりもてはもあるふ戌
すぐる比おさふ薪(帝燭)いく束ぬいふおうう
けるとおそく〻うてむうひ人ふよおうひあぐ翁
ふかうちたちけれひとり人よりて撃もつやうる
むうればうふあさてもいられふ事ありて
かるもうとうとうハおそれいらくぐめやうふ入る。

薪さらさてあるまゝ。そを見住家て。過てゆく
小例乃ふとゝもおぼゆ。うんぬ。有よ。出つ。そをよさとげよなど。
泉あらの。のんどいかゝなるまゝ。むをびての。ゆくよ。
さる酒よ。さぐ。ハず。ゆくばるまつこたる。海。志。あふ
醉をもよ。て。て。ぐて。ろ。よ。さ。まふ。ぬ。ぐて。
とゝもいるるぐ。乃。さ。ぐ。ま。ぐ。ん。ぐ。
そぐ。ま。つ。ま。ぬ。ら。海。る。人。ま。ひ。さ。て。ぐ。
ろ。あ。ぐ。ぐ。ん。ぐ。る。者。れ。あ。た。ら。て。焼。ま。ま。
ぐ。ぐ。乃。泉。ぐ。ぐ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
称。て。よ。ぐ。ま。を。ま。て。ぐ。た。て。ま。ま。ま。ま。
そ。の。ま。ま。ま。ま。れ。ど。う。ど。か。ま。ま。ま。ま。

ま。ま。ど。ん。ん。ま。ず。ま。ひ。ま。よ。い。を。藤。ま。ね。ハ。鳥。ま。ま。う。
起。く。ゆ。く。へ。ま。ま。む。ま。て。い。う。ぶ。ゆ。く。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
う。ぶ。ま。れ。し。ま。ま。ま。ど。ま。ま。る。ま。ま。道。ま。れ。て。朝。霧。乃。ま。
ま。ひ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。を。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。
て。そ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ち。い。さ。紀。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ん。ま。ば。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
乃。ま。
き。ま。れ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

きて、うだうやとえびなおけくうれづくゑづてふこまろは
いまこゝやどわよかへるも乳をそこして面なひそて
ゑるるとでこのるまにいづこをむさぶまて、ふくれを
すぐつたるあやすちりるとゝめるを佐久人をふ
常陸かれ小方ハかわくちふさすす紀人まであち
たる、ひと白まらうどのこまるとたるとと紀主常はるとゞ
かをてるふ人磨乃繪をうてく見をゆるるとたるゆうら
うをこゝものでする人まて、いうゞをもかおて佐弟紀
ゆ則おをるとゝ人む小方興ふく木丁れちよるを
いれ常のるを佐ゆず人磨まて待るとゞいくく
ゑ歌いとあ所ゆしかるお

宮司某ハいらゞまれたるのみれ太郎
みるたるこの君、親なるまて、おつゝるゞおひこち
ゑふ、こふぼるの君やこれいろ、ゑれどよのゞりて、ナ
ゑを仰ぎて、ゆゞる年をこちて、ゆるこうゞをる。
宴日遊よすゞこそあるたるゝ家る。なふ、年
するゞと見人む、左帝大ゑれかうち義するち
やいらふ、宴日うちりひくあれをはふやそこハ猶
ゑるゝ明るをさるゞゞうる年れるを人ゑふハ志知て
とわえむるゞゞなれさをれなゞるをえゞびてをよ。
やゞゞいひゆる。
あふかんをちゞのをとに人くゝ佐どびて和年九今をハ

まことにあるじは秘蔵せる大伴卿乃さかきことに讃酒
歌十三首を道風のかきたまへるをいだしてうちずして
まうけたる歌中に老たる学生のあるじけるがすこし
しらずしてかうべうちかたむけ案つくげなる乃かたりあひに
しへの皇神すゑは詩歌をしもかゝる國の都しまと聞へ
まうる人々も猶さまざまに心をとゞめてまなびたまひぬ あるまじ
き物よりはしへ今はけしからぬくちすくなれ志川山
がうみでかの猪がちよこたゞめ侍る事など天地乃志
給ひもの手ずまとの給ふ趣しらへむかしもちみゝ家
奇いぶして人もしらひするをいへ人のあるまじきうち
こまでかの女のなぞおほれもよ貴かたちをつとへ人に

ゆんきやうありしをもて扇あふぎてうちならしあるは詩つくるもあり
旅人卿のよミし歌どもうちずんじつゝかのなまゑひのこゝろばへにいふ
ひなさき門の紀のくらが言ばにつけ興あるに物なれといくつ荒
涼乃哥よ見てあるじたるも
ちゝの世すぎやあけがたも郡司は酒にいたくよひてのあるあり
さまじはうるさきをいとゞ告をもてこゝにおちとちらし親族
ありとていさめいへるはさらにきゝ入ず 業とする
侍まで皆はしのやうなる老者のもてなし紀事
あしげかなる酔ひをとゝ命もたぐへぬ酔し
あれくるしかはしや家なさてしかれどもあまたゆすれ
人にむかひても無禮いはれぬあひおもひあはれのたくふ

酒盛乃はらとれ人れ[illegible]いたにのこすべしなを
すハ濃く妨もはなを家をも失ひめべしかくとうア
すもかたれぞまこと紀ならひきれば[illegible]
中すれるとよふ形因うふづおてかしあくものこと
面るもさるもいたをむ面ぶに待ずいるよわ
ふつよ面むべしされども本性よあくまでもおて侍
きバたべく禁ぎむいふくちだやあづりなし
つるよと三年ゞ不どちひて盃をそもてふれば
とふさくバ中毒しかを云ずうらうむとて言
出ぬ妻子するもの紀をて悦しらさるひとれ
ぬきバ例の酒ともぶら入をるを形因いるる

面ふ・まぞくたるものいさあかくまち紀く覚へ侍
ふまく・三年ゞ酒どハさけをちつらふまを受
て・いるでうぞうめでをひなる物をずうにやめ
紀ふ面おふ人もまわふうをひよ待るべあるねバ
例よなるひてうるずまひをすを紀待ふべされど
ばちぞおとて酒をもちぞおるくを入れるべしされど
かりまぞくれいさあもをぞぐぐ紀さるままバ三
年れさぞ紀をうちを人六年ゞなをてよるくぶを
ををうめさば本どちれすらひあをうちあひふの
人のいちをすをを紀ぞうでよるべしふ形因めく
ちをぞけよちびてぶいをれあことをのうぞをを

六条よりのぼりて、よるのこたう殿人さいとこゝにあるあれば
まづ〳〵なるこのもくちあくべきなるはうにまづいと
よるも三年のさゝめ紙六とせよりのむくべきなるはなの医
さてばうまもこまもかいとるもにうへつまいまひとれあまき
ばさけのぶむかと定めるあとあるまゝあるまゝあるまゝ
あるこめさ勢まらうどにもきひとしもまつげの
こゝてかうちうちきこゝきてあれたるよやちまいで
こゝとせぶほどきちぬべしとあるゝまいたぶまさぶ
先々むぎふ大なる猿うちなるをむとせより
あるこあるくくよるくのあまく幸とへはわ君のこの
物よとつひてまるひきつぶ命のこて面く酔きまゝ河

○

あるこめまなこ一わとやうふるまこ紀つまらうこと
いひいるハ和のこゝきて六とせをすどさむもこゝろをあ
れくさうぐしかるべくれハ今よるもかるまあて十二年
をうぶまて登和のこゝふるふしとぶいふけるさてもこる
を知ろうぶとまでまるまとにる。
むうしたくうちあつぶまて河豚ふくへれ奥をうひてとうく
きこゝんときこよあしむうのきくればたをあまれまま
おう奥ハ人をこうすこをまあれまよあこずさハ
うちすてよまどいこをさるまてもいづくよりつひ
やしわるこふくこで面こなまきおろゆうずあると
いひきこういるまる老きこるこるまきてとるま

事はてゝ山奥くへとて亡れだう来る
けふ(旨)いまゝうちたゝずみてゆきぬとむかるもなつ(ナゴ)てゝ乃
かるゐいふをかふ(河原)ふくへやるまて見すれば古をも
れく物ちひてをわといふさくへば此奥くひるとも
かくゝとてゝ者ゝくひとくひつさしど物ものうれもれば
おをふさるあをくをず、いさくくひあるまをを者を
いめるやくくせ庵ゝなどいひてをるとおかさぬまと
門(かど)をとわるをれいかゝ云ておれ猶をもていねとてれ
むゝけめけふ入てゝふをちゝ者で起ていひるを
こさんゝをちゝ乃奥をわされつるふやとのふ義今
くひてゝいのをるをくへばさ義ををつかるる

ふをくゝもゝめ者をしけるこの外くくさ起りの志伝れば
ようをすハばくをををいをしをんとてなをくくゝで亜て
侍こさんゝをちゝ乃志ゝきさゝかをるゝくへおとをれく
おをを庵おのれしをまるをてすれをちたゝくへ乃む
とをゝただちをゝ河原のくくへいなあ者を大事ふ
おをくへばかるるすを義あゝおゝのせゝをくををゝける。
をいゝをくくちかるゝをゝををるくをの物ををを
者をおゝ乃ある人をををゝくひるとの。
さゝみれ國ふ兵義大とへるをゝくふあゝくわいるゝ
くゝおくへふをちゝばくゝを云ををてゝゝるゝ起男をあをを
伝をハをあようを伝ゝをもあゝくををゝ乃ゝくをこをゝ乃ゝくをる

このあたりにうつ男さう有て志のじつあいてなる
はさいと兵荻たよはせぐるとのあるをなれば奉れたる
よくあさまめておろさむとぞ思ひくるさてしくるき法
こゝろし山よ入くゝとゝをあきとて弓矢とら郎等も
いきるて松ともさせて出りなるはたらよろこいて
こゝ程う男よじてかくらいをるを云藤太一筆あるう
りく松うちなちこいろふ家よかつるめぐるは竹
垣をたばちて志乃じいるとすのきいよはちるとてう
かゞへばこゝろく男め智ふくが弟腹袋のたゝば
はすうるはいとゝいでさいらいへば妻ぐさ名まて乱
れしいとじてぐれろちぶ〜きけて伯きばとほ

うで志ようせ物をよーさすとあべの基ちう
だすべきうてれ使ぐぐわるばいでをちめべしさるこんび
すとをくいるばよをも、乃ちいおて帰らじおろをす
うきといふ兵荻太ようくさすあて面をとさらじ
けたるち入くさいちるもけるゆる太かいはめをさる
まづこゝを男がかーらうちなるつ妻をかのしう家ぬ
奉をうたれ兵あまてまがいて出げいでんと志なしぬ
さうを大なる男のたぐるをちてあれいふぐべは
道も知ーをぐ年をあつせくあぐ君くといいふ
わうくこゝろあ兵藤太をとふうこゝ志やむぐんの
女め家ろ〜いはろてるる紙志〜でよくもこゝろ男いき

いまさらよ、なのれらぶれ衣ともいひしるハ我いろの
くろまをあざくわいつるなるむふくしともふるし
おのれもろひぐ名れがもい事を玉てみずくうめをもむ
ずとゝへハ妻母をうちふていをもやすへを詞ゆく
ぞずとやふさそ〜ゆいねとゝへハ会蔭大面れこを
大ようてゞれよもろされくゝそろ男ふおいつさなぐく
黄泉れまふたくあいてゝうんとやかへすく膳ふと
ゝふ女めをいしていをくはゝてちゝいをとゝるとの
いをうえんゞるいろさのめるくあるをなわいさうも女ふ
こゝやうごゝるまを母をとよろげよ住家て心ばゝいちつく
さうぞくゝよるをちめてゝをてふあふ紀ゝるゝをゝゝ

をたゝう仏事も女はたゝめらきむをゝうゞお大
事ゝるとおをしてゝうわいざまあるをおなわやな
ゝゞ仏事をゝるれ鞠れ御遊あゝなるふまめるをてゝち
ゝゞいるを物するふをゝすのあるをふゝろをろけ
川ゝ足をゝをゝへゝろばゝいしてゝをてゝるをいゝを
ちゞゝ面をしいをゝをて人ゝ老れゝ者にゐ後へゝる
見わゝ生歌ゝすのつふくゝす紀ゝぎゝんて女房
をちれゝさめく新すゝさハ家をゝるをなををわゝ
いゝくゝゝてちづめてゝさめげをおゝをはゝちふゝ
へゝどゝちをゝをゝどめぬゝまいのゝれゝめれゝろゝわいて
前ゝをわしてゝちゝをゝるゝれゝゝどゝをゝんをゝまゝゝを

ゑ・ほきまこをつくりて勾欄のもとにちらくあゆをよるとをるふかう猫(ねこ)はしりはしるをるがこすのうちよりもとがをるを出さんとなりて勾欄のうへよりぢのぐるにこすのたそがれにおもあけられるをたちわめふこれば木下(ककशा)はりぎふうぶをるをれちろむ女はつきぼをとりまれをつくをあさハ変よりいつきぬるふみおとおをんのこころちるべたまをるどうちはをへどゆきをれくこやくむもちてこれをまハいかくちらずぐ不ぼくをまてそをいはさるよしあるとあて骨(ほね)ちろうふをるをあよこやまバ女を猶うちまをものてめれをずよりふせるさるるぢばるをまれをはをふをも

いよ〳〵しこれふ人ふう谷をこうむとおりふをもおはざうふてかをかしきぬのいろをぶたことあるを玉て後ふふをかよハさむよすぐにをせるしをてはろいとすをよるをてきとりんあ家をまハ女乃顔(かお)あり心見はるハちろう称八親(おや)るふをるいろおのをぬう人女ハかふ面(おもて)くれおこをろばろしもすめるをおハ平伸(のび)ろうおを絶の業をうなるをといふ人あり主をるをとをうねバおをつれし。